不定期刊行　　第512号　2014.03.16

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

池工山岳部　今年度の活動の締め　山スキーと雪洞泊

終業式はまだだが、すでに春休み気分の生徒と今年度最後の山行を行った。実は小生、今年度末の人事異動で池工を去ることが決まっており、池工山岳部の顧問としての引率も今回が最終となる。その意味で今僕ができる一番のパフォーマンスを生徒に提供したいと考えた。大上段に振りかぶるわけではないが、池工を去るにあたり、何か生徒にインパクトを与えたいと思ったわけだ。

山域は僕にとってのホームグラウンドの乗鞍とした。もちろん日帰り登山も可能だが、やはり最後は生徒と同じ釜の飯を囲みたいと思い、敢えて山中一泊とした。そして、形態もワカン、山スキー、ボード等生徒それぞれに任意の方法を選択できるように計画した。さらにこの時期ならではの積極的な雪の使用として、雪洞泊を体験させることにした。

15日は日本列島が広く高気圧に覆われて最高の天気。パーティは1年生2名、2年生2名にF先生と小生の6名。僕が池工を去った後もコーチをしてくれる山内君が荷物運びを手伝ってくれた。9時に学校集合、山スキーの生徒のためにセキュラフィックス（アルペンスキーのビンディングにセットして踵をフリーにできる器具）とシールの調整をしてから出発する。11時30分に乗鞍スキー場に到着した。リフトを3本乗り継いでゲレンデトップに出たのは12時30分。用意をしていると、上から滑って来た人がカリカリに凍っていて散々だったと情報を伝えてくれる。確かに斜面は堅い。

最初の急斜面に山スキー組の2人の生徒が大苦戦。しかし、雪が雪、またシールも全面シールでない上に、初めてのシール登高とあってはそれも無理からぬこと。「この急斜面さえ抜ければ、難所は終わるから」と励ましつつ上へ上へと導く。今日の雪洞予定地は位ヶ原下部の斜面を予定しているので、慌てることもないし、わかん組についているF先生も心得ている。そこまでは雪崩や道迷いの心配もないので、難儀している山スキー組は僕が面倒を見て、スノーシューとわかんの3名を先行させる。天気はピーカンで高天ヶ原の北面と乗鞍の東面がテカテカに光っている。難儀しながらも16時幕営予定地に到着。

2月以来の雪がまだたっぷり残っており、穴を掘るには十分だ。日没は18時ごろ、18時半くらいまでは日の目が見える。とは言ってもそれほど時間の余裕はない。休憩もそこそ

こに直ちに穴掘りを開始する。若者は馬力があるが、雪掘り技術は未熟だ。最初に雪を切ることを教え、三か所から掘り始めさせる。雪は結構締まっており、堅かったが日没寸前の１８時前、およそ1時間半の作業で6人が一夜を過ごす雪の宿が完成した。

計画を立てているとき、「重い荷物はやだなぁ」という生徒の一言にすかさず「じゃ、テント持っていかない方法があるじゃん！」と水を向けたのが、雪洞泊決定の直接の要因だったが、前回の黒沢尾根登山で雪洞掘りを体験させておいたことも有効に作用したのは言うまでもない。生徒にとっては、予想以上の重労働だったようだが、できた雪洞は立派なもの、一夜を過ごすのに何の不都合もなかった。早速キムチ鍋とご飯を炊いて今日の苦労をお互いに労いあう。疲れからか、初体験の雪洞の中でも生徒たちはよく眠っていた。一時間おきに時計を見る不眠症の僕をしり目に！

あまり早く行動しても雪面が堅いだろうと、翌16日の起床は6時。ゆっくりと朝食を摂って、8時に出発予定とした。春に3日の晴れなし、前日日本列島を覆っていた高気圧に変わり、16日は日本海に発生した低気圧が急速に発達した。朝目覚めたときは青空も見えて穏やかな様子だったが、出発する頃には小雪が舞い出し、風も吹き始めた。視界も悪く昨日あんなにきれいに見えていた乗鞍が今日は見えない。それでも、行けるところまで行ってみようと、位ヶ原台上への急斜面に取り付く。台上はやはり猛烈に吹いていた上に、視界が遮られ最悪の状況になった。それでも2780mのダケカンバの疎林の脇まで登り、いったんツェルトをかぶって急場をしのぐ。しかし、吹き降ろしの風が、雪を巻き上げ、一瞬息をしている間はいいが、そうでない時は視界が全くない状態だ。ここからは、扁平な地形になるため地形判断を誤ったり、スキーとワカン混合隊が分断でもしたりしたら、大ごとになる。命あっての物種、三十六計逃げるに如かずと撤退を決定。生徒には、地図を見て雪洞の方角にコンパスを合わせさせ、とにかく同一行動をとること、万が一仲間を見失ったら、コンパスに従って進むことを確認して、ゆっくり下山を開始した。僅かな距離ではあるが、この天候の中、位ヶ原の広い台上で方向を失ったら完全にアウトである。決め事は基本的で当たり前のこと、単純なことだが、慎重の上にも慎重を期す。

９時50分全員一緒に雪洞に到着。わずかの時間ではあったが、生徒たちには厳しい時間帯だったかもしれない。コーチの山内君が一日遅れで上がって来ることになっており、電話で連絡を取ると今まさにゲレンデトップを歩き出したということだったが、雪も強くなってきたので、彼の到着を待たずに下山。途中で合流し、12時には無事駐車場到着。山麓の湯けむり館で汗を流して、一年の活動を締めた。